

J.LEAGUE NEWS

Official News Letter
vol. 132
26.Dec.2006



編集・発行
社団法人日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

Amazing J.

スポーツで、もっと、幸せな国へ。 Jリーグ百年構想



© J.LEAGUE PHOTOS

J.League Official Sponsors

Calbee

Canon

SUNTORY

JOMO

NicoS

KONAMI

AIDEM

HEIWA

GE Money

浦和が J 1 初優勝

2006 Jリーグ ディビジョン1 (J1) は最終節にもつれ込んだタイトル争いの末、浦和レッズが直接対決でライバルのガンバ大阪を破り、初優勝を成し遂げた。連覇を狙ったG大阪は、川崎フロンターレに抜かれて3位に終わった。同じくJリーグ ディビジョン2 (J2) でも、横浜FCが1試合を残して初優勝を決定。最終節では柏レイソルが2位に浮上した。J1・J2間の入れ替えは、セレッソ大阪 (J1の17位)、京都パープルサンガ (J1の18位) に、入れ替え戦で敗れたアビスパ福岡を加えた3チームが降格。福岡に勝ったヴィッセル神戸が、横浜FC、柏とともに来季J1に昇格する。2006 Jリーグアウォーズでは、浦和のJ1優勝に貢献した田中マルクス闘莉王が最優秀選手賞を受賞した。

Network Partner



League Cup Sponsor



Jリーグ百年構想
パートナー

朝日新聞



優勝におけるチェアマンコメント

浦和レッズの初のリーグ優勝を心からお祝い申し上げます。
 Jリーグ14年目にしてのリーグ制覇は、監督、選手、クラブをはじめ、長く応援してくださったファン・サポーター、関係者の方々にとって、感極まる瞬間であったことでしょう。
 今季の浦和レッズは、シーズンを通して多くの観客を魅了する試合を展開してきました。3年目を迎えたブッフバルト監督は、個々の選手の持ち味を存分に生かしながら、チームを一つにまとめあげるといふ難しい役割を見事に果たしました。浦和レッズのカラーである攻撃サッカーに、今季はリーグ最少失点を記録する堅守が加わったプレースタイルは、選手たちが個々の最も得意とするプレーに磨きをかけ、チームに貢献するためにその力を最大限に発揮した成果であると思います。
 また、今年Jリーグ最多観客数記録も更新した素晴らしい地元サポーターの応援は、選手たちの力を10倍にも20倍にもし、熱狂のスタジアムの中、ホームで無敗試合を続け、着実に勝点を積み重ねた大きな原動力となったといえるでしょう。
 チャンピオンにふさわしい、真の勝負強さが兼ね備わった栄冠を大いにたたえたいと思います。

(社)日本プロサッカーリーグ
 チェアマン 鬼武健二

J1

浦和が初優勝

Jリーグ ディビジョン1 (J1) が1ステージ制となって2年連続、最終 (第34) 節にもつれ込んだタイトル争いは、浦和レッズが制した。浦和は初優勝。ヴェルディ川崎 (現東京ヴェルディ1969)、横浜マリノス (現横浜F・マリノス)、鹿島アントラーズ、ジュビロ磐田、ガンバ大阪に続き、6つ目のJ1優勝経験を持つチームとなった。

最終節を前に、優勝争いは浦和、G大阪の2チームに絞られ、タイトルの行方は埼玉スタジアム2002における直接対決に委ねられた。主導権を握っていたのは首位の浦和。G大阪に勝点3差をつけ、2点差以内の敗戦でも1位が決まる有利な状況だ。

アウェイ側ゴール裏の一角を除き、クラブカラーの赤に染まったスタンドは、大声援でホームチームを後押し。だが、G大阪も3点差以上の勝利を目指し、昨季王者の

意地をみせる。21分、エースFWマグノ アウベスが均衡を破り、「最高のスタート」(G大阪の西野朗監督) を切った。

一方、浦和も先制パンチを浴びて「目が覚めた」(浦和のブッフバルト監督)。6分後にFWポンテが同点とし、44分にはFWワシントンが逆転ゴール。後半にもワシントンが加点し、G大阪の反撃をDF山口智の1点に抑え3-2の勝利。ついにJ1の頂点を極めた。

試合終了後、キャプテンのMF山田暢久は「やっと皆さんの期待に応え、優勝することができた」とサポーターに勝利を報告。表彰式では、7月まで浦和の代表取締役社長を務めていた犬飼基昭Jリーグ専務理事より選手、監督に優勝メダルが授与され、チャンピオンフラッグが手渡された。そして、鬼武健二Jリーグチェアマンより山田にJリーグ杯 (優勝銀盃) が授けられると、スタンドの興奮は最高潮に達した。

就任3年目でJ1優勝に導いたブッフバル



ト監督は試合後の記者会見で「敗戦後、(敗因を) 分析して改善したこと」を、栄光への重要なポイントに挙げた。それが、J1において連敗のない、安定した戦いぶりに結びついたのである。

浦和はG大阪戦で、ホームでの連続無敗記録を22試合と更新。6万2241人の入場者は、2001年10月13日の浦和对横浜FM戦

J1順位

順位	チーム	勝点	試合	勝	分	敗	得点	失点	得失差
1	浦和レッズ	72	34	22	6	6	67	28	39
2	川崎フロンターレ	67	34	20	7	7	84	55	29
3	ガンバ大阪	66	34	20	6	8	80	48	32
4	清水エスパルス	60	34	18	6	10	60	41	19
5	ジュビロ磐田	58	34	17	7	10	68	51	17
6	鹿島アントラーズ	58	34	18	4	12	62	53	9
7	名古屋グランパスエイト	48	34	13	9	12	51	49	2
8	大分トリニータ	47	34	13	8	13	47	45	2
9	横浜F・マリノス	45	34	13	6	15	49	43	6
10	サンフレッチェ広島	45	34	13	6	15	50	56	-6
11	ジェフユナイテッド千葉	44	34	13	5	16	57	58	-1
12	大宮アルディージャ	44	34	13	5	16	43	55	-12
13	FC東京	43	34	13	4	17	56	65	-9
14	アルビレックス新潟	42	34	12	6	16	46	65	-19
15	ヴァンフォーレ甲府	42	34	12	6	16	42	64	-22
16	アビスパ福岡	27	34	5	12	17	32	56	-24
17	セレッソ大阪	27	34	6	9	19	44	70	-26
18	京都パープルサンガ	22	34	4	10	20	38	74	-36

J1得点ランキング上位

順位	選手名	所属	得点
1	ワシントン	浦和	26
1	マグノ アウベス	G大阪	26
3	ジュニーニョ	川崎F	20
4	ルーカス	FC東京	18
4	我那覇和樹	川崎F	18
4	佐藤寿人	広島	18
7	チョ ジェジン	清水	16
7	播戸竜二	G大阪	16
7	ウェズレイ	広島	16
10	前田遼一	磐田	15

(埼玉スタジアム2002)の6万553人を抜くJ1最多記録となった。

また、得点王となったのは、ともに26ゴールのマグノ アウベスとワシントン。複数の選手が得点王となるのは、Jリーグ史上初めて。2003年から4シーズン連続、外国籍選手のタイトル獲得が続いている。

浦和との「優勝決定戦」に敗れたG大阪

は3位に後退。最終節でセレッソ大阪を3-1と破った川崎フロンターレが、前季の8位から2位へ躍進した。

激しい競り合いを展開

第32節でアビスパ福岡、C大阪、京都パープルサンガの16位以下は決定しており、残る2節は入れ替え戦出場か、自動降格か

をめぐる争い。まず、第33節で京都がG大阪に2-3と惜敗し、18位(最下位)と自動降格が決定。最終の第34節では福岡がヴァンフォーレ甲府と1-1で引き分け、C大阪が川崎Fに1-3と敗れた。この結果、福岡とC大阪は勝点27で並んだが、得失点差で福岡が16位となり入れ替え戦へ。17位となったC大阪が自動降格となった。

J2 横浜FC、柏がJ1自動昇格

Jリーグ ディビジョン2(J2)は、横浜FCが初優勝を飾り、2位となった柏レイソルとともに、12月4日に開かれたJリーグ臨時理事会でJ1への昇格を認められた。3位のヴィッセル神戸は、J1の16位と対戦する入れ替え戦へ出場することになった。

第49節で横浜FC、神戸、柏の3位以内が確定し、自動昇格への条件の一つとなる2位



© J.LEAGUE PHOTOS

以内を目指す戦いが最大の焦点。勝点2差で神戸、柏が迫る状況で迎えた第51節、アウェイでサガン鳥栖と対戦した横浜FCは、FWアレモンが77分に挙げた決勝点により1-0の勝利を収めた。ライバルの2チームのどちらかが引き分け以下なら、2位以内が決まる。そして、神戸が湘南ベルマーレと2-2、柏がコンサドーレ札幌に2-3という結果により、1試合を残し優勝の栄誉も手中にした。

クラブ創設から8年目、J2入りから6年目で、念願のJ1昇格。今季は第1節後に監督交代というスタートだったが、高木琢也監督の下、強固な守備力を基盤に「1戦、1戦、選手たちがたくましく」(高木監督)成長し、長丁場を戦い抜いた。



© J.LEAGUE PHOTOS

最終の第52節に突入したのが2位争い。神戸が勝点1差で柏をリードしていたが、ベガルタ仙台に1-2の敗戦。柏が湘南に3-0の快勝で2位の座を確保し、見事に1シーズンでのJ1復帰を果たした。

なお、来季のJ2入りを目指していたロッソ熊本は、日本フットボールリーグ(JFL)で5位に終わり、Jリーグ臨時理事会で入会を見送られた。

J2順位

順位	チーム	勝点	試合	勝	分	敗	得点	失点	差
1	横浜FC	93	48	26	15	7	61	32	29
2	柏レイソル	88	48	27	7	14	84	60	24
3	ヴィッセル神戸	86	48	25	11	12	78	53	25
4	サガン鳥栖	79	48	22	13	13	64	49	15
5	ベガルタ仙台	77	48	21	14	13	75	43	32
6	コンサドーレ札幌	72	48	20	12	16	77	67	10
7	東京ヴェルディ1969	71	48	21	8	19	69	75	-6
8	モンテディオ山形	65	48	17	14	17	68	57	11
9	愛媛FC	53	48	14	11	23	51	63	-12
10	水戸ホーリーホック	51	48	14	9	25	48	69	-21
11	湘南ベルマーレ	49	48	13	10	25	61	87	-26
12	ザスパ草津	42	48	9	15	24	54	86	-32
13	徳島ヴォルティス	35	48	8	11	29	43	92	-49

J2得点ランキング上位

順位	選手名	所属	得点
1	ボルジェス	仙台	26
2	フッキ	札幌	25
3	レアンドロ	山形	23
3	新居辰基	鳥栖	23
5	ディエゴ	柏	21
6	アレモン	横浜FC	18
7	アンデルソン	水戸	17
8	平本一樹	東京V	15
8	三浦淳宏	神戸	15
10	ロベス	仙台	14
10	田中俊也	愛媛	14

J1・J2入れ替え戦 神戸が1シーズンでJ1復帰

ホームアンドアウェイ方式で行われたアビスパ福岡(J1の16位)対ヴィッセル神戸(J2の3位)の2006J1・J2入れ替え戦は、2試合とも引き分けしたが、神戸がアウェイゴールの数で勝利1シーズンでのJ1復帰を決めた。逆に福岡は、1年でJ2へ戻ることになった。

神戸ウイングスタジアムにおける12月6日の第1戦は0-0。この結果、第2戦で勝

利を収めたチームが来季のJ1入り。得点が記録された引き分けの場合は、アウェイでのゴール数が上回る神戸の昇格が決定。無得点引き分けは前後半各15分の延長戦を実施し、それでも決まらない場合はPK方式に勝敗が委ねられるという状況になった。

東平尾公園博多の森球技場に舞台を移した3日後の第2戦は、60分にFW近藤祐介がマークした先制点で神戸が優位に立つ。

福岡の猛反撃を受けて84分にMF布部陽功に決められ同点とされたが、懸命の守備でしのぎ切り1-1のスコアでタイムアップのホイッスル。2006年6月まで福岡を率いていた神戸の松田浩監督は試合後、「チームの大目標を達成できて良かった、という安堵感でいっぱい。選手たちは辛抱強く、勇気をもってプレーしてくれた」と、選手たちの健闘をたたえた。

2006 J.LEAGUE AWARDS

最優秀選手賞は田中マルクス闘莉王

「最高の仲間たちと楽しく1年、サッカーができたことが何より」

今季のJリーグを締めくくる祭典「2006 Jリーグアウォーズ」が12月18日、横浜アリーナで開催された。昨年に続き、日本サッカー協会名誉総裁の高円宮妃久子殿下のご臨席を賜り、同協会の川淵三郎キャプテンをはじめとするサッカー関係者、オフィシャルスポンサーやメディアの関係者、そしてJ1各チームのサポーターらが見守る中、各賞が発表された。会場は華やかな雰囲気にもまれ、終了した戦いに思いを馳せつつ、3カ月後に始まる来季への期待を新たにしていた。



©J.LEAGUE PHOTOS

最優秀選手賞の田中マルクス闘莉王選手（浦和）

Jリーグアウォーズで最も注目される最優秀選手賞は、初優勝を遂げた浦和レッズのDF田中マルクス闘莉王が受賞した。浦和の守りの要として、J1リーグ戦の33試合に出場。守備ラインの中心にあって、闘志あふれるプレーとリーダーシップを発揮し、J1最少失点を記録する上で大きな役割を果たした。また、7得点を挙げるなど、攻撃面の活躍も見逃せない。DFの同賞受賞はペレイラ（1994年、ヴェルディ川崎）、中澤佑二（2004年、横浜F・マリノス）に続いて3人目。浦和の選

手では、2003年のエメルソンに続き2人目。正賞としてブック型楯、賞金200万円、副賞として（株）デサントからゴールドエンボルトロフィー、（株）スカイパーフェクト・コミュニケーションズから「ファーストクラスで行くカリブ海クルーズペアの旅」を贈られた。ステージ上のスピーチでは「涙もろいほうなので」と前置きしながら、「（浦和の）最高の仲間たちと楽しく1年、サッカーができたことが何より」と喜びをかみしめていた。

その「最高の仲間たち」のうち、MF鈴

木啓太、FWワシントンが、田中とともにベストイレブンに選出された。田中は3年連続の受賞だが、鈴木、ワシントンは初の栄誉。初受賞は一昨年の6人、昨年の7人を上回る8人となり、世代の交代を感じさせる結果となった。しかし、日本代表でも長らく活躍しているGK川口能活（ジュビロ磐田）の初受賞というのは、やや意外な感も。「ベストイレブンの一つの目標だった。それをクリアできて非常にうれしい」と感激を言葉にした。

昨年、ベストイレブンに最多の3人を送



得点王を分け合った(左から)ワシントン(浦和)、マグノ アウベス(G大阪)両選手



新人王に選ばれた藤本淳吾選手(清水)

ベストイレブン。(左から)山口 智(G大阪)、川口能活(磐田)、中村憲剛(川崎F)、鈴木啓太(浦和)、田中マルクス闘莉王(浦和)、ワシントン(浦和)、阿部勇樹(千葉)、マグノ アウベス(G大阪)、加地 亮(G大阪)、谷口博之(川崎F)の各選手 ※遠藤保仁選手(G大阪)は体調不良のため欠席

2006 J.LEAGUE AWARDS 受賞者一覧

最優秀選手賞(MVP)	田中マルクス闘莉王(浦和)
(GK)	川口能活(磐田)
(DF)	田中マルクス闘莉王(浦和)、加地 亮(G大阪)、山口 智(G大阪)
ベストイレブン	鈴木啓太(浦和)、阿部勇樹(千葉)、谷口博之(川崎F)、中村憲剛(川崎F)、遠藤保仁(G大阪)
(MF)	ワシントン(浦和)、マグノ アウベス(G大阪)
(FW)	ワシントン(浦和)、マグノ アウベス(G大阪)
得点王	ワシントン(浦和)、マグノ アウベス(G大阪)
新人王	藤本淳吾(清水)
フェアプレイ賞 高円宮杯	※本年度は該当チームなし
フェアプレイ個人賞	山岸 智(千葉)、根本裕一(大分)
最優秀監督賞	ブッフバルト(浦和)
優秀主審賞	上川 徹
優秀副審賞	廣嶋禎数
Jリーグベストピッチ賞	平塚競技場
功労選手賞	小島伸幸(草津)、相馬直樹(川崎F)、澤登正朗(清水) ※チーム名は最終所属

り込んだガンバ大阪は、今年も4人が選ばれ最多となった。2人のFWには、ともに26ゴールを記録して得点王を分け合ったワシントン、マグノ アウベス(G大阪)が名を連ねている。

新人王に輝いたのは清水エスパルスのMF藤本淳吾。今季のJ1で28試合に出場し、8得点を決めた22歳は「来年は新人王からステップアップし、飛躍の年にしたい」と、早くも来季に向けての抱負を述べた。フェアプレイ賞 高円宮杯は9年連続、該当チームがなかったが、J1で警告・

退場処分を受けていない選手の中から選ばれるフェアプレイ個人賞がジェフユナイテッド千葉のMF山岸智、大分トリニータのDF根本裕一の両名に授けられた。

最優秀監督賞には、浦和をJ1初優勝に導いたブッフバルト監督。今季限りで日本を去ることを発表しているだけに、感激もひとしおだろう。優秀主審賞、優秀副審賞の受賞者はそれぞれ、上川徹氏、廣嶋禎数氏。2006 FIFAワールドカップ ドイツ™の3位決定戦もコントロールしたコンビは、「最高の年」(上川氏)、「ラッキーな1年」(廣嶋

氏)と今季を振り返った。

Jリーグベストピッチ賞には、J2の湘南ベルマーレのホームスタジアム、平塚競技場が選ばれた。また、長年の日本サッカー、Jリーグに対する貢献により、功労選手賞が小島伸幸(最終所属クラブはザスパ草津)、相馬直樹(同じく川崎フロンターレ)、澤登正朗(同じく清水エスパルス)の3名に贈られた。年間優勝チーム表彰では、川淵キャプテンより浦和に日本サッカー協会会長杯(キャプテン杯)が授与され、J2優勝を飾った横浜FCの紹介も行われた。

2006Jリーグ チェアマン総括

(社)日本プロサッカーリーグ
チェアマン 鬼武 健二



7月の就任時に、「個性を生かしたJリーグ」をチェアマン指針として掲げた。その第一歩として、より魅力的な試合を実現するために、フェアで、かつ、激しくひたむきなプレーの徹底をクラブに傳達した。レフェリーへの執拗な異議やベンチマナーの悪さも改善を求めた。個性溢れる魅力的な試合と多くのファン、サポーターに形作られる「熱狂のスタジアム」の創出は、「Jリーグ百年構想」の軸を成すものである。クラブ、選手が個々の特性を生かすようさらに努力してほしい。

■ リーグ戦・カップ戦について

J1リーグ戦で初優勝した浦和レッズは、クラブ、地域、サポーターがひとつになって栄冠をつかんだ。選手が持ち味を最大限に発揮し、観客を魅了するサッカーを実現したことを高く評価したい。また、2位の川崎フロンターレも、J1昇格2年目にして飛躍した。両者には、Jリーグを代表し、来年のACLの制覇を期待し、また同時に、浦和にはA3の制覇も狙ってほしい。最終節まで優勝争いに絡んだガンバ大阪の戦いぶりも見ごたえがあった。

昨年優勝争いに絡んだセレッソ大阪の降格、また、今年J2からJ1に昇格した京都パープルサンガ、アビスパ福岡のわずか1年での降格は非常に残念。改めて、中長期的視点でチーム強化に取り組み、J1復帰を目指してほしい。ヤマザキナビスコカップで連覇を果たしたジェフユナイテッド千葉は、リーグ戦とは一味違ったトーナメント方式のカップ戦の醍醐味を多くのファン、サポーターに示してくれた。

J2では、市民クラブからスタートし、8年でJ2優勝とJ1昇格を果たした横浜FCが素晴らしかった。また、降格から1年でJ1復帰を果たした柏レイソル、ヴィッセル神戸も、シーズン後半苦しい戦いが続いたが、耐えて昇格をつかんだ。苦しい経験を無駄にすることなく、来年J1で堂々と戦えるチーム作りを励んでほしい。

今年は、多くのクラブで、有望な若手選手の台頭が目立った。得意なプレーに徹底的に磨きをかけ、次代の日本サッカー界を担う選手に育ててほしい。また、Jリーグの選手を経験した若い指導者も活躍し始めた。ユースからトップまで、指導者の育成は急務であり、ますますの努力とレベルアップを期待したい。

■ 観客数

年間836万3963人の総観客数は、昨年に続き史上2番目の記録となった。各クラブの努力を評価し、多くのお客様の来場にご感謝したい。今年は、各クラブで、スタジアムでのサービス向上に加え、地域密着のホームタウン活動を推進することで観客数増加を図る施策も見られた。一方で、クラブ間の差、今季J1からJ2に降格したクラブの観客数の落ち込みは課題として残った。順位やスター選手に頼ることなく、また、J1・J2に関わらず、長くクラブを応援してくれるファン・サポーターを増やしていく施策が必要であろう。

また、将来構想委員会では、スタジアムの設備やアクセスなど、理想的なスタジアムのあり方についても議論を始めた。今後改修予定のスタジアムやJ1

リーグ入りを目指す地域に対して、より魅力的なスタジアムのモデル像を示していきたい。

■ 選手育成

ここ数年、Jクラブ下部組織出身選手のJリーグでの活躍、またユース年代の日本代表に下部組織所属選手が多く選出されるようになるなど、Jリーグ・アカデミーを中心とした育成・普及活動が結果となって現れてきている。今年は、U-12 Jリーグ・アカデミーフェスティバルやU-15 Jリーグ選抜ブラジル遠征など、クラブ間の交流、海外経験などの機会も増えた。

現状、国内のユース年代の大会は、学校教育制度に合わせて構築されている。技術力、フィジカルに差が出る中学、高校年代では、出場選手が高学年に偏る傾向があり、13歳(中1)、16歳(高1)の選手の試合出場機会は極端に少ない。コンスタントに試合をする環境の確保、年代別のきめ細やかな指導体制構築は必須であり、来年より、まずは13歳年代のリーグ戦をスタートし、段階的に各年代のリーグ戦を構築していきたい。

選手育成システムを構築する過程において、日本サッカー協会との連携もさらに密なものとなってきた。日本サッカーの発展のために、今後も引き続き協力体制を強化していきたい。

■ 経営情報開示

今年より、新たにクラブ個別の経営情報を開示した。これまで段階的に全クラブの集計値などを公表してきたが、ようやく個別情報を公開できたことは有意義であり、地域との絆作り、仲間作りのために必要であったと認識している。

Jクラブは、地域に開かれた存在であり、社会に対して説明責任がある。クラブを支援していただいている行政、地元企業に対しても、子供を預けていただく保護者や教員の方々に対しても、経営情報開示は、我々の大きな義務であると考えている。

また、将来、Jリーグ入りを目指すクラブや行政、地元企業にとっても、クラブ経営を理解していただくよい参考となるであろう。

各クラブには、身の丈に合ったクラブ経営を維持しながら、地域や企業の支援を得て身の丈そのものを大きくしていくような努力を推進してほしい。

■ 放送権契約

長くご支援いただいているスカパーフェイクTV、NHK、TBSと、来年より5年間の放送権契約が基本合意に至った。これにより、J1・J2全試合が生放送で中継されることとなった。地域のローカル放送を含め、従来を上回る露出を確保していきたい。

ここ数年、Jリーグのスポンサー契約、放送権契約の関係は、権利についての対価をいただくだけでなく、より密接にパートナーシップ化してきていると感じている。来年以降も、スポンサー、放送局の特性を生かし、各クラブと連携したマーケティング活動を行うなど、友好な関係を構築していきたい。

■ Jリーグ百年構想の広がり/Jリーグ予備軍の増加

各クラブが、より特性ある地域に密着したホームタウン活動に取り組むようになってきた。今年も、学校訪問や地域行事への参加など、選手が参加する社会貢献活動も着実に増えてきた。プロクラブ、プロ選手の社会的役割は大きく、さらなる活動の推進を期待している。

また、将来Jリーグ入りを目指すクラブ、団体が全国に40~50と急速に増えてきた。現在のJクラブの地域密着型のスポーツクラブ作りが広く理解され、共感していただける仲間が増えてきたものと嬉しく思っている。そうした動きに伴い、将来構想委員会で「J2クラブの将来像」を示し、「準加盟制度」を立ち上げた。今後は、Jクラブだけでなく、Jリーグ予備軍に対しても段階的なクラブ作りのサポートができるよう体制を整えていきたい。

写真提供: © J.LEAGUE PHOTOS



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。